

2019年7月26日（金）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 松平莉奈さんWS 近世中期の上方文芸を 秋成を例にいろいろ考えてみる

1, 飯倉洋一先生をお招きして

これまでのワークショップをとおして 1、江戸時代中～後期の約30年の間江戸で出版された黄表紙（大人向けの絵入り読み物）に関心を抱いた松平さんは、黄表紙の始祖とされる『きんきんせんせい金々先生えい栄花夢』²（安永4年〈1775〉刊、恋川春町作・画）の模写を作成され、様々な気づきを得たそうです³。

黄表紙は、江戸の俗文芸の最も華やかな時期に流行したもので、ともするとポップで愉快的なイメージだけが先行してしまいがちですが、実はその作者たちは高度な知識を持った武士が中心で、真面目な文化なくしては成立しなかった文芸なのです。

そこで2019年度2回目のワークショップでは、江戸時代中期の文芸にお詳しい飯倉洋一先生（大阪大学教授）にお越しいただき、当時の文化の在り方について、松平さんと一緒に考えました。

1 https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary_contents/matsudaira_3102_05.pdf

2 当館蔵：<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200015145/viewer/1>

2, 上田秋成とは何者か

飯倉先生は、江戸時代中期（18世紀後半～19世紀初期）に、かみがた上方（京都・大阪）活躍した文人・うへだあきなり上田秋成（享保19～文化6年〈1734～1809〉）を中心に研究をしておられます。

秋成は短編怪異小説集『うげつものがたり雨月物語』（安永5年〈1776〉刊）で有名ですが、いわゆる小説家としてだけでなく、歌人や茶人として高い評価を受けていました。また市井にありながらも、文芸を通じて宮家の方々との交流があったといえます。

さまざまな顔を持つ秋成を手掛りに、この時代について考えてみるというのがワークショップの趣旨でした。



3 模写の様子についてはこちら→

https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/matsudaira_handwriting_copy.pdf

2019年7月26日（金）

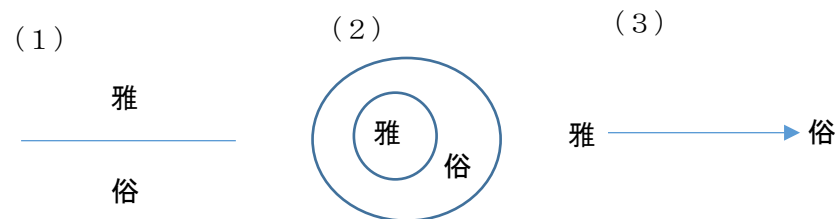
3, 雅俗について

江戸時代のことを分析する時に非常に有効とされているのは、〈雅俗〉と呼ばれる概念です⁴。一般的に〈雅〉とは正統で伝統的なもの、高貴なものを指し、〈俗〉は新しいもの、卑近なものを指します。俗は常に雅から生み出されるという考えに基づき、雅俗のバランスで当時の文化を考えるという方法を学んできた私も、近世文学研究者として、自分の論文のなかでしばしば雅俗について触れてきました。

ところが飯倉先生は、その二元的な捉え方に疑問を抱いておられるようで、仮に次のような構図を示してくださいました。

- 1) 人品論としての雅俗（身分論）
- 2) 都鄙論としての雅俗（空間論）
- 3) 新旧論としての雅俗（時間論）

この3本の柱に従ってそれぞれの概念図を描くと、次のようになります。



⁴ 中野三敏『十八世紀の江戸文芸』（岩波書店、2015年）など。

そして雅俗は絶対的な概念（二元的な概念）ではなく、雅の中に俗がふくまれたり、俗の中に雅があったりする場合を考えの方が良いのではないかというご提案でした。



黄表紙はいわゆる俗文芸を代表するジャンルではありますが、その一方で、共通の知識や情報がないと読み込めないという閉じた側面もあり、俗と言い切ってしまうのも良いのかという議論は、以前から出ていたところでした。このような存在について、当時の社会や文化に即して説明する時に、雅俗という言葉が無批判に使い過ぎない方が良いのでは、という示唆であったと思います。

2019年7月26日（金）

この話題に関して、同席しておられた先生方や院生のみなさんから様々な質問や意見が寄せられました。松平さんはそれを見て、研究者は答えを知っている存在ではなく、いつも疑問を抱いて考え続けているのだということを知り、大変驚かれたそうです。このように、問いを持ち、より良い説を導き出すワークショップの場は、AIR、TIRのみならず研究者にとっても大変重要なのです。

4, 写本の世界、人と繋がる文芸

飯倉先生がご用意くださったトピックスはもうひとつ、「写本とは何か」ということです。写本とは手書きで記された本のことを指し、何かを見て写したものだけではなく、日記なども含みます。

印刷されたものは版本（板本）と呼びます。江戸時代は印刷技術が発達し、多くの版本が出回ったおかげで、現代にもたくさん残されています。

さて、書物の機能を「今」「ここに」いない人へ何かを伝えることだとすると、写本は時間を超えて誰かに伝える縦の機能、版本は空間を超える横の機能を持っていると考えることができるそうです。

江戸時代以前には、書自体への敬慕の気持ちや、書者＝学びという考え方があり、写本の場合は何が書いてあるかよりも誰が書いた

のかが大切な場合があるそうです。また、どのような紙に、どのような筆跡で書くかによって一本一本が異なる写本の希少性や、誰が誰のために書いたのかが明確で、写本と所有者の特別な関係性という特徴についてお話くださいました⁵。

これまでのワークショップでは、主に版本について扱ってきたので、全く違う写本の世界に興味津々の松平さんです。



飯倉先生はこの日、秋成の作品を例にさまざまなお話をしてくださいましたが、なかでも印象的だったのは、画賛のお話です。

画賛とは、絵に添えて和歌や詩を記したもののことで、秋成にいさもそれぞれ異なるということも述べておられます。

⁵ とはいえ文芸としての価値が一律にあるとは限らず、信用度の高

2019年7月26日（金）

くつか特徴的な作品があるそうです。

特に印象的だったのは、「霜雪の暁ごとに起きなれて 雲の香啜る命なりけり」という和歌を認めた、秋成晩年の一幅。秋成が親しんだ煎茶のことを「天の雲」というようで、「雲の香」はお茶の香り。寒い時期に煎茶を愉しむ秋成の姿が想像されます。お軸の下方には煎茶に使う茶碗や炉が書かれているのですが、文字の一部（香啜る）が湯気のように見えます。



文字と絵で自由に遊ぶことのできる写本ならではの工夫ですが、この一幅は、秋成が失明の危機にあった際に治療を成功させた、医者谷川家に収められたものなのだそうです。秋成は谷川家に並々

⁶ 活字で印刷された本ですが、様々な種類の紙を使って美しく仕上げているうえ、同じ文字でも違う形の活字を使っているため、本来

ならぬ感謝を抱いており、さまざまな作品を収めたそうで、筆写と写本の所有者との繋がりを、強く感じることができる事例です。

5,さまざまな問い、なぜそのメディアを選ぶのか

写本の世界に触れたワークショップを終え、松平さんの黄表紙模写について思いを馳せました。元々版本だった黄表紙を、松平さんが模写したことで一点ものとなったことは不思議な現象のようにも感じますが、入口先生は、写本と版本の間のような嵯峨本⁶や、大切な版本を写した写本が存在することを示してくださいました。

松平さんは、日本画を続けるなかで、なぜ絵画を選ぶのかという問いと向き合っておられるのだそうです。ワークショップのなかで、なぜ写本を選ぶのかという問いと向き合い、ご自身の画業と照らし合わせて考えたり、版本で手軽な形態をしていながらも、受容できる人だけができれば良いという性質をもつ黄表紙という存在について考える、新しい手掛りを見付けられたようです。



印刷技術が持つはずの便利さとは逆行しています。